

活人剑的出处

「活人劍」のいわれ



陸軍軍医 佐藤進



建立当初の活人劍碑



清国全權大使、李鴻章



活人劍建設の経緯は、その参戦者である可睡齋四十八世日置黙仙齋王が記した副碑「旌徳活人劍碑」から知られる。それによると、その目的は、日清戦争終結時に国難を救った陸軍軍医總監醫學博士佐藤進（順天堂第三代堂主）の功績を讃えるとともに、この戦争で亡くなった日清両国の戦死病死者供養のためと記されている。

明治二十八年三月、日清開議和条約締結の為に来日した清国講和全權大臣李鴻章が文芸会場からの帰途、暴漢に撃たれ重傷を負う事件が発生した。まさに國を揺るがす大事件である。

この時、勅命により李の治療に当たったのが佐藤である。李の傷が快方に向かう中、李と佐藤との間で行ったような会話が交わされたことと活人劍台座の石柱碑に刻まれている。

この石柱碑は、修証義の編者として有名な宗教家、大内青巖の撰、書によるものである。

常に軍服帯剣の正装で診療に当たった佐藤に対して、李は「医者の仕事にどうして剣が必要なのか」と尋ねたところ、佐藤は「これは活人劍です。日夜、百の病と戦い、必ずこれに打ち勝ちます」と応じ、李を深く感動させた。

その後、この活人劍の話は、美談として世間で好評になった。佐藤が可睡齋における日置禪師の先任であった西有穆山禪師の下でかつて参禅した縁があったからであり、このことに活人劍と可睡齋との深い縁を感じた日置禪師が、発願、建設したのが可睡齋「活人劍」である。剣の部分は、明治を代表する彫刻家、高村光雲の手によるものであった。

明治、第二次世界大戦で供出され、残ったのは剣の台座の石柱碑と、李が佐藤にお礼として贈った七言俳句と旌徳活人劍碑の刻まれた石碑（副碑）のみとなった。

その俳句の中で、李は自分の現在の苦衷を中国の故事になぞらえて表示すると同時に、佐藤への感謝の気持ちを「妙手回春」と、匠者としての中国での最大の褒め言葉をかけて讃えている。

この度の、平成の活人劍再建に当たって、剣は現代の名工である宮田亮平東京藝術大学学長が制作し、場所も山門横の景勝の地に移すとともに、旧活人劍の跡地の周辺整備も行った。

二〇一六（平成二十八）年三月吉日 活人劍再建委員会

旧新活人剑的说明牌

之所以建造活人剑可以从建议设置活人剑的可睡斋第 48 代方丈日置默仙所写的副碑文“旌徳活人剑碑”上有所了解。根据碑文讲述，建设活人剑的目的是为了表彰在日清战争结束之时以高超的医术拯救了国难的陆军军医总监佐藤进（顺天堂第 3 代堂主）的伟绩，以及为纪念两国的战死者以及病死者而建造的。

明治 28 年（1895 年），为签订日清两国之间的媾和条约，大清国媾和全权大臣李鸿章来日访问。在离开谈判会场返回住宿之路的路上，发生了李鸿章被暴徒袭击的事件，此事件震撼了全国。当时，受天皇之命给李鸿章治疗伤病的正是佐藤。在李鸿章的伤病就要治愈的时候，在李鸿章和佐藤之间发生下面

一段对话。这段对话被刻在活人剑台座的圆柱形石碑之上。

此圆柱形石碑是由名的宗教家，修证义的编者大内青峦的撰述而书写的。

李鸿章对总是穿军服并佩着刀剑的佐藤问道，”医生在工作时为什么需要刀剑呢？”

佐藤回答说，”这是一把活人剑，我拿着它日夜和百病战斗，百战百胜。”

对此回答，李鸿章深受感动。

之后，关于活人剑的这段故事成为了家喻户晓的佳话。佐藤之所以能临机应变地用活人剑回答李鸿章的疑问是因为他曾在可睡斋日置禅师的前任方丈西有穆山禅师的的手下学过禅宗。日置禅师从这段佳话里感到活人剑和可睡斋之间缘分不浅，于是就建议并建成了可睡斋活人剑。剑是由代表明治时代雕刻文化的雕刻家高村光云制作的，但是在第2次世界大战中这把剑被交公，只剩下剑的台座的圆柱形石碑以及作为副碑的石碑，副碑上面刻有李鸿章赠写给佐藤的七律诗以及施德活人剑碑文。

在那首七律诗中，李鸿章以谈古论今的方式在表达自己当时的苦衷的同时，也怀着对佐藤的感谢的心情以“妙手回春”这四个字来称赞佐藤，“妙手回春”在中国是对医生的最高评价的称赞之词。

今天我们迎来了活人剑再建之日，剑是由当代名手宫田亮平东京艺术大学校长制作的，剑的设置场所移到了山门旁边的景胜之地。另外，我们对原来设置活人剑的地方也进行了整修。

2016年（平成28年）3月吉日 活人剑再建委员会